近代小説 鑑賞と研究

分銅惇作編

東京堂出版

鑑賞と研究

分銅惇作編

東京堂出版

編者略歴

大正一三年（一九二四）秋田県に生まれる。昭和二六年、東京文理科大学国文科卒。近代文学専攻。現在、東京教育大学助教授、日本近代文学会会員。

著書―「高村光太郎詩集・鑑賞」「宮沢賢治詩集・鑑賞」「中原中也」「現代詩評釈」（共編）「読解講座現代詩の鑑賞」（共編）「近代詩鑑賞辞典」（共編）など。

近代小説 鑑賞と研究

定価は帯またはカバーに表示してあります。

昭和五〇年一月三〇日 初版印刷
昭和五〇年二月一五日 初版発行

編者 分銅惇作（ぶんどう じゅんさく）
発行者 岩出貞夫
印刷者 株式会社三秀舎
製本所 協和製本株式会社
発行所 株式会社 **東京堂出版**
東京都千代田区神田錦町三ノ五（〒一〇一）
電話東京二九一局八二二六 振替東京二七〇

1091-250102-5164

©Junsaku Hundō 1975

はしがき

近代文学の研究は近年著しい進展を示し、すぐれた業績が相次いで発表されている。複雑多岐にわたる文学研究の全貌を的確にとらえることは、個人の能力では不可能に近いといってもよい。各分野の専門家の共同研究がまたれ、要を得た解説書がのぞまれるゆえんである。

もとより、文学の享受・鑑賞はあくまで主体的であるべきで、しょせん自分の目を信じるよりしかたのないことだが、自分の目がいかに狭く、たよりないものであるかは、誰しも経験しているところである。先行文献を踏まえて研究的に読むということは、自分の目をよりたしかなものに鍛えあげていくことであり、かくして文学の理解が真に深まり、享受がいっそう豊かなものになる。

本書は日本近代小説とその思潮について、専門的な理解を深め、研究法を学習する目的で編まれたものである。直接には大学における近代文学研究の専門的なテキストを念頭に置いたが、広く一般教養的な文学享受にも役立つことを期した。これまでも類書は少なくないが、単に作品を適当に並べて解説を付した程度のものが多く、学習に効果的と思われないうらみがあった。

本書は東京教育大学近代文学研究室を中心に各大学の近代文学担当教官が協力して、多年にわたる共同研究を続け、編集会議で慎重な検討を重ね、専門的な文学研究と教育的な学習効果をあわせ

考えて、特に次の諸点に意を用いて編集した。

一、初めに「概説・近代小説と思潮」を置いて、近代文学の流れの全体を見通すことができるように配慮した。

一、各時代の主要な思潮との関連で、代表的な作品を選択し、作品の独自な価値と史的な意義を研究することができるようにつとめた。

一、作品研究を深めるために、各作者の「年譜」を掲げ、【参考資料】として主要な研究文献を抜粋して紹介した。

一、作家論・作品論の問題点を明らかにするために、これまでの研究成果を踏まえた【研究ノート】を付して、研究の手引きとした。

一、小説・資料ともに原則として原典どおり収録することとし、全文を引用することができない場合は、最も重要な部分を抜粋するようにした。

意図したところは以上のとおりであるが、要は文学研究の実際に役立つということであり、類書にない新味をくふうすることができたとひそかに自負するものである。

昭和五十年一月

分銅惇作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

概説

近代小説と思潮

明治の小説と思潮

啓蒙主義と新文学の胎動　文学の近代化が本格的に始まるのは明治二十年代にはいってからであるが、それまでの約二十年間は啓蒙主義の時代として概観される。この時期の特色は、維新後の政治の刷新と安定をはかりつつ、西洋の文物・制度・思想を取り入れて文明開化につとめ、近代化への胎動を始めた時期であり、文学的には、残存する旧文学がしだいに衰退し、新たに翻訳文学や政治小説が盛行して、新しい文学運動が形成されていく過程である。

文明開化を標榜し、前時代の封建体制・思想の不合理から脱却して、政治的、知識的な解放を求めようとする動きは、自由と合理精神の尊重となって現われ、功利主義・実用主義の風潮を強めるが、その推進力となったのは、「明六社」に結集した福沢諭吉、加藤弘之、中村正直、西周らの啓蒙思想家たちの運動であった。ことに諭吉の『学問のすすめ』(明5—9)や、スマイルの『自助論』を訳した正直の『西国立志篇』(明3—4)は、その清新な内容と平易な文体によって広く愛読された。また西周の『百一新論』(明7)や中江兆民の『維氏美学』(明16—17)などで、新しい文学観念の模索が始められていた。

しかし明治初期の建設的な努力は、主として政治・経済・科学などの実用的な方面に注がれ、文芸は軽んじられていたので、江戸末期の戯作文学の伝統がしばらく残存し続けていた。戯作文学の流れをくむ作家には、仮名垣魯文、高畠藍泉、染崎延房らがいて、読本・合巻の類が惰性的に刊行されていたが、時勢の進むにつれて、その中から新時代への適応をはかる動きが現われ、魯文は『西洋道中膝栗毛』(明3—9)『安愚楽鍋』(明4—5)で、文明開化の風俗を描いて新味を出すことに成功している。戯作者とは別に、成島柳北、服部撫松らの漢学者の戯文・戯詩も流行し、柳北の『柳橋新誌』(明7)、撫松の『東京繁昌記』(明7)は、いずれも当時の開化の世相を軽妙な筆でとらえている。が本質的には旧文学の延長にすぎず、やがて新文学の気運に押されて衰退すべきものであった。

またこれと並んで、西洋の風俗・人情を知るためと

いう実用的な目的から、西洋の文学作品が紹介されはじめ、ことに十年代になると翻訳文学が盛んになった。ジュール・ベルヌ原作（川島忠之助訳）『八十日間世界一週』（明11）やリットン原作（丹羽純一郎訳）『花柳春話』（明11）などが、その清新な内容で好評を博し、国民をして外国文学に目を開かせると同時に、従来の戯作文学の低俗さに反省を与えるきっかけとなり、啓蒙の役割を果たした。

明治十年代はまた自由民権運動の強まった時期でもあるが、民衆の政治的啓蒙と政党の理想宣伝を目的として書かれたのが政治小説である。自由党の板垣退助が外遊したおり、ユゴーから民衆に政治思想や知識を与えるのには、政治小説によるのが近道だと教えられ、その種のものを持ち帰って部下たちに翻案や創作をすすめたのに起因すると言われている。作者が文芸家ではなく、政論家であったので、文学観の古さと表現の生硬さが見られるが、文学と民衆の間に興味本位でないまじめな関係を結び、従来の戯作文学が低俗な娯楽物とみなされていたのに比べて、文学の人生的・社会的な意義を認識させた役割は大きい。代表的な作品として、矢野龍渓『経国美談』（明16—17）、東海散士『佳人之奇遇』（明18—30）、末広鉄腸『雪中梅』（明19）などがあるが、政府によって直接日本の現実を扱うことを禁ぜられていたので、ギリシア、スペインなど諸外国の政治史に題材をとって、政治理想を説き、慷慨の情を述べたものが多い。政治小説は、その成立の事情から民権運動の敗退と運命をともにして、一時期の文学現象に終わったが、日本近代文学成立のための幾つかの重要な前提を用意している。

写実主義から浪漫主義へ　翻訳文学と政治小説の流行によってうながされた新文学の気運に、革新的な方向を与えたのは坪内逍遙の『小説神髄』（明18—19）の写実主義の提唱であった。人情世態の模写を説き、心理学の方法を述べ、勧善懲悪の功利主義を排して、文学の独立性を主張したが、なによりも逍遙が東大卒業の文学士であったという事実が、多くの青年たちを刺激し、文学が彼らの情熱を寄せるに値する仕事であるという自覚を与えた。内田魯庵の言を借りると、「夫れまで政治以外に青雲の道が無いやうに思ってゐた天下の青年は此の新しい世界を発見し、俄に目覚めたやう

に翕然として皆文学に奔った」ということになるが、このような刺激を受けて、いち早く文学活動を始めたのは二葉亭四迷である。彼はロシア文学にくわしく、逍遙の写実論を発展させて『小説総論』（明19）を書き、その実践として『浮雲』（明20―22）を発表した。時代への文明批評の意図で書かれたこの小説は、個性的な自意識に苦しむ近代知識人の姿を〈余計者〉として典型化することに成功しながら、未完で中絶されたが、言文一致体を創始した点でも画期的な意義をもつ作品であった。

当時の文壇で逍遙と並んで啓蒙的な活動を続けたのは森鷗外である。ドイツ留学から帰朝後、翻訳・創作を始め、訳詩集『於母影』（明22）は新体詩運動に海外の新声を伝え、『舞姫』『うたかたの記』（明23）『文づかひ』（明24）の滞独記念三部作は初期浪漫主義の萌芽をなすものであった。また雑誌「しがらみ草紙」（明22創刊）によって啓蒙の論陣を張り、逍遙の写実主義に対立して理想主義を説き、逍遙との間にいわゆる歌理想論争をかわして、文壇を刺激した。

明治二十年代は、政治的には憲法の発布、国会の開設など維新の改革が新局面を迎え、社会的、思想的にも発展的な方向をたどった安定期であり、新文化・純文芸を創造しようとする気運がとみに高まりつつあった。当時の文壇で主勢力をなしたのは、尾崎紅葉を中心とする「硯友社」の写実主義の作家たちである。紅葉は『二人比丘尼色懺悔』（明22）で文壇に登場し、『三人妻』（明25）『多情多恨』（明29）などの名作を発表し、『金色夜叉』（明30―35）を未完のまま没するまで人気作家として第一人者であった。硯友社には他に山田美妙、巌谷小波、川上眉山、江見水蔭、丸岡九華、広津柳浪、石橋思案らがおり、文人気質に立ちながらも、それぞれ写実的な風俗小説に才能を示している。

また紅葉と並び称せられたのは、『風流仏』（明22）『五重塔』（明24）などで力倆を示した幸田露伴である。紅葉が女性像を写実的に描くのに長じていたのに対して、露伴は気魄に富む男性像の創造につとめ、観念的な理想主義の傾向を示し、世にいう紅露時代を現出した。この時代に慧星のように現われて夭折した天才的女流作家が樋口一葉である。『たけくらべ』『にごり

え』『十三夜』（明28）などで、過渡期に生きる女性たちの不幸な運命を凝視しながら、浪漫的な筆致で、哀愁をたたえた詩情豊かな作品を残した。

封建的な体制・思想を打破する力となったのは啓蒙思想であるが、新時代の情熱を歌いあげ、人間性の解放、思想・感情の自由を求めて理想的、主情的な傾向を示したのが浪漫主義である。この浪漫主義が思潮として明瞭な形をとるようになるのは二十年代後半からであり、新運動の口火をきったのは、雑誌「文学界」（明26創刊）によった北村透谷、島崎藤村、星野天知、平田禿木、戸川秋骨、馬場孤蝶らの活躍であった。ことに透谷は評論ではげしく旧思想と戦い続け、『厭世詩家と女性』（明25）『人生に相渉るとは何の謂ぞ』『内部生命論』（明26）などを執筆し、恋愛の高貴、人生の意義、自我の覚醒などを説いて初期浪漫主義の指導者と目され、また藤村はその第一詩集『若菜集』（明30）で、青春の浪漫的感情をみずみずしく歌いあげ、発想・形式ともに画期的な近代叙情詩風を樹立することに成功した。「文学界」に続いて浪漫主義運動の拠点となったのは、「明星」（明33創刊）であるが、与謝野鉄幹・晶子夫妻を中心に、いわゆる星菫時代と呼ばれる華麗な浪漫詩の全盛期を迎え、論壇では高山樗牛がニーチェの影響を受けた個人主義思想から極端な自我主義を提唱し、『美的生活を論ず』（明34）はその極端な主張を本能満足説にまでおしすすめたものである。

また日清戦争後は、国力が振興し、資本主義機構が急激に拡大されたが、それに伴う社会のひずみや不安を反映して、泉鏡花、川上眉山、広津柳浪らの「硯友社」系の人々の中から、従来の単調な写実小説にあきたらず、人生の矛盾や罪悪などを主題にした観念小説・深刻小説が現われたが、深い意味での社会的、政治的な批判精神を持つものではなかった。したがって行きづまりも早く、三十年代にはいると、鏡花は観念小説から転じて非現実的な傾向を強め、名作『高野聖』（明33）で空想的・神秘的な華麗な作風を確立したことによって、かえってその浪漫性が高く評価された。また陰惨な深刻小説よりは大衆性のあるメロドラマ風の家庭小説が歓迎され、徳富蘆花の『不如帰』（明31—32）が人気を集めた。家庭小説と前後して、社会の現象・諸問題をとらえようとする社会小説も起こり、『社会百

面相』（明35）を書いた内田魯庵や、『火の柱』（明37）『良人の自白』（明37～39）で社会主義思想を打ち出した木下尚江らの活躍が注目された。

他に三十年代の代表的作家のひとりに国木田独歩がいる。蘆花と同じく「民友社」の出で、キリスト教やワーズワースの思想的影響を受け、『武蔵野』（明31）『春の鳥』（明34）などで、自然と人生の詩的真実を求める叙情性の豊かな作風を示し、晩年には『窮死』（明40）『竹の木戸』（明41）などで現実の暗さを客観的に描く自然主義の作風に変わっていった。

自然主義と反自然主義　自然主義は人生の事実を空想をまじえずに実証的・科学的な方法で観察し、客観的に描写しようとする文芸思潮である。もともと浪漫主義に対立するものとして十九世紀後半にフランスを中心としたヨーロッパに起こった運動であるが、その影響が日本の文壇に顕著な形で現われるのは、明治四十年前後の数年間である。すなわち日露戦争後、産業界は急激に発展し、資本主義体制が整備拡大されるにつれて、貧富の対立や社会不安が深刻な問題となり、これまでの浪漫的傾向にあきたりない人心は、現実を直視しようとする精神を強め、一方、ようやく成熟を示してきた個人主義的な自我意識は個性の確立を求めて文学の新気運が醸成され、かくして、フランス自然主義の影響下に、自然主義運動が興隆期を迎えることになる。この傾向は三十年代のなかばころに、小杉天外の『はつ姿』（明33）あたりをはじめとするゾライズムの流行に端を発しているが、島崎藤村の『破戒』（明39）や田山花袋の『蒲団』（明40）によって、新文学としての方法を確立している。

藤村は信州の小諸時代に詩から散文に転じ、部落問題を題材として『破戒』を執筆するが、自我にめざめる主人公の告白に託して、作者自身の内面の苦悩を描き、自然主義の先駆的役割を果たした。ついで『春』、『家』（明43）などの傑作を相次いで発表し、封建的な社会や家からの解放を願う切実な思いを客観的な筆致で描いている。また花袋は自己の体験の事実を客観的に描いた『蒲団』で、告白的なリアリズムの方法を確立し、さらに『生』（明41）、『田舎教師』（明42）などの力作を発表して、自然主義の旗手と目された。他に徳田秋声の『新世帯』（明41）『足迹』（明43）『黴』（明44）、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正宗白鳥の『何処へ』（明41）、岩野泡鳴の『耽溺』（明42）、近松秋江の『別れたる妻に送る手紙』（明43）などの代表作が次々に発表され、自然主義作家の活動は文壇の主流を形成するに至った。花袋の平面描写論やそれと対立する泡鳴の一元描写論などリアリズムの方法が論議されたが、当時の論壇で指導的な役割を果たしたのは島村抱月、長谷川天渓、片上天弦、相馬御風らで、現実尊重の無理想・無解決を掲げる自然主義理論の組織化をはかった。

自然主義の運動は本格的な近代リアリズムを確立した点で画期的な意義を持っているが、フランスの場合と比較すると作家に政治的、社会的な関心が欠け、題材が作者の狭い身辺の経験にかぎられがちで、虚構性を失った平板なリアリズムに陥った。さらに、伝統的な感傷性を十分に払拭し切れない知性の弱さがあったために、いたずらに現実暴露の悲哀に沈み、懐疑的、虚無的な色彩を強めている。このような身辺小説、告白小説としての性格は、やがて私小説化の道をたどることになるが、他方こうした傾向に対する批判から反自然主義の動きも発生してくる。その中心は森鷗外と夏目漱石であった。鷗外と漱石は自然主義の意義は認めながらも、その安易な体験主義に批判的な態度をとり、イズムにとらわれない自由な立場から、外来文化と伝統文化との対立・葛藤の渦まく日本の近代化の苦悩を最も内面的に受けとめ、個人主義文学の可能性を追求しようとした。

鷗外・漱石と個人主義文学　鷗外・漱石に共通する特徴として第一にあげるべきは、その文学精神を支える士太夫意識であり、きびしい倫理感である。かれらはともに留学体験を通して西欧個人主義思想を摂取し、それを日本に移植するために、まだ未成熟な社会条件下で悪戦苦闘を余儀なくされた。鷗外は明治二十年代初頭に『舞姫』で、近代的自我に目ざめた一青年が半封建的な官僚機構の枠組の中に生きるために、人間的な愛情を犠牲にしなければならなかった悲劇を描いたが、四十年代にはいってから『青年』（明43）で、因襲を超えた個人的道徳として〈利他的個人主義〉を説き、大逆事件に象徴される思想界の混迷に処して『かのやうに』（明45）で〈折衷主義〉の考えを示し、乃木殉死事件を契機として歴史小説に転じた。『興津弥五右衛

門の遺書』（大1）『阿部一族』（大2）から『澀江抽斎』（大5）に至る数多くの作品群では史実を尊重しながら、通俗道徳を超えた献身的行為者の姿を描き、伝統の内部に新しい個人主義倫理の可能性を探ろうと努めている。

一方、漱石はイギリス留学で〈自己本位〉の思想にめざめ、帰国後創作活動をはじめ、『吾輩は猫である』（明38）『坊っちゃん』（明39）などの小説を発表して文壇に登場した。初期は社会諷刺と鋭い文明批評で生彩を放ち、『草枕』（明39）では〈非人情〉の詩境を求め、その高踏的な姿勢から余裕派・低徊派などと非難されたが、朝日新聞入社後は本格的な作家生活に入り、『三四郎』（明41）『それから』（明42）『門』（明43）の前期三部作では、主として社会と個人、とくに知識人における恋愛をテーマとし、後期三部作『彼岸過迄』（明45）『行人』（大1）『心』（大3）では自我内部の我執の追求に目を向けている。最晩年は『道草』（大4）『明暗』（大5）で、自他のエゴイズムを剔抉し、人間心理の解剖も精緻をきわめ、エゴイズム浄化の普遍的倫理を抽出しようとした〈則天去私〉の文学思想に到達している。

明治文壇の指導者として鷗外・漱石の果たした役割は大きく、その影響下に次の世代の反自然主義的な新しい運動が相次いで起きることになる。まず鷗外の影響下にあった雑誌「スバル」（明42創刊）「三田文学」（明43創刊）などからは耽美的な芸術主義の運動が始まり、永井荷風、木下杢太郎、谷崎潤一郎らが登場し、また漱石の周辺には森田草平、鈴木三重吉、小宮豊隆、寺田寅彦らのいわゆる〈漱石山脈〉系の作家・学者がおり、さらにその影響を受けながら「白樺」派の理想主義や「新思潮」派の新現実主義の運動が起こり、大正期の文学として開花することになる。

大正の小説と思潮

耽美派の芸術主義　明治末期の文壇の主勢力を形成した自然主義の運動は大逆事件後の時代閉塞の状況のなかで、急速に自我貫徹の積極的な意欲と批判的な姿勢を失い、時代に対する傍観的態度から狭い文壇意識にとじこもり、薄暗い日常生活を描くだけの平板なリアリズムに堕した。こうした自然主義文学の傾向にあ

きたりないところから、鷗外・漱石の影響下にあった若い世代から反自然主義の諸運動が起きてくる。まず当時盛んに紹介された十九世紀末西欧文学の刺激を受けて、自然主義が見失っていた〈芸術の美神〉の復活を願い、ひたすら官能と感覚の解放を求める耽美派の文学が生まれた。「スバル」「三田文学」「新思潮」（第二次・明43創刊）などによって活躍した北原白秋、木下杢太郎、吉井勇らの詩歌人や永井荷風、谷崎潤一郎、長田幹彦らの作家たちが輩出した。かれらは芸術至上主義的な態度から異国趣味や江戸情緒にあこがれ、戦慄的な官能美に沈湎して、享楽的・頽廃的な傾向を示した。その先駆的役割りを果たしたのは永井荷風であり、中心的グループは「パンの会」である。

荷風は初期にゾライズムの影響を受けたが、欧米遊学から帰って『あめりか物語』（明41）『ふらんす物語』（明42）で詩情豊かな作風に転じ、『新帰朝者日記』『冷笑』（明42）では当時の卑俗な開化を痛罵する鋭い文明批評を試み、『すみだ川』（明42）で江戸情緒を追懐する風俗小説に新しい境地を開いたが、大正期にはいってからは『腕くらべ』（大6）『おかめ笹』（大7）などで花柳小説を書き、戯作者的な反俗の姿勢をとり続けた。

荷風の推賞ではなばなしく文壇に登場したのが谷崎であるが、『刺青』（明43）『少年』（明44）などの作品で、幻想と空想をほしいままにして官能美を求め、倒錯的で濃艶な作風を展開した。後に谷崎文学は古典的な伝統美に根ざした豊麗な世界を完成するが、初期から晩年に至るまで一貫して変わらない特徴は、女性拝跪と母性憧憬の情が融合した〈肉体の思想〉とでも呼ぶべき傾向で、人生と切り離されたもっぱら芸術プローパーの耽美的精神が見られる。

他に耽美派の作家としては、ややおくれて佐藤春夫、久保田万太郎、水上滝太郎らがいる。佐藤は『田園の憂鬱』（大7）『都会の憂鬱』（大11）などで、世紀末的な倦怠感をにじませた詩情の美しさと東洋的な文人趣味に、すぐれた理知のひらめきを加えた作風を見せ、久保田は浅草界隈の下町情緒を、水上は山の手の生活雰囲気を描くことにすぐれていた。

「白樺」派の理想主義　大正初期にはトルストイ、ドストエフスキイの文学やオイケン、ベルグソンの哲学が紹介され、普遍的な人間性を追求する理想主義の

傾向が強くなるが、そうした影響を受けて、耽美派とは対照的な人道主義を標榜する文学運動が起きてきた。その中心は雑誌「白樺」（明43創刊）によった武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎らである。「白樺」派の思想的特色は個性を尊重し伸長することによって、人類の幸福に貢献しようとする楽天的、肯定的な人生観であり、正義と愛の精神を強調して、自我拡充の方向を目ざした。

武者小路はこの派の思想的リーダで、かれは自分たちを〈人類の意志〉の担い手であるとし、〈自己を生かす〉ことがそのまま〈人類の意志〉に合致するものと考え、自己肯定の意欲にあふれた理想主義の態度に終始した。初期の作品『お目出たき人』（明44）『世間知らず』（明45）は、自分の恋愛や結婚をめぐっての感情を、気どらずに率直に告白し、いわゆる〈話すように書く〉文体で独自な魅力を示した。その後、第一次大戦が始まったころの作品『その妹』（大4）『ある青年の夢』（大5）などでは、人道主義の立場から反戦思想を表現して注目され、さらに『友情』（大8）『人間万歳』（大11）などになると、その思想性がいっそう深められている。この間、大正七年には九州宮崎県に赴き、年来の理想を実現するために「新しき村」を建設した。当時はちょうどシベリア出兵、米騒動などの続く社会の大きな転換期でもあったので、この企ては賛否両面にわたる反響を呼んだ。楽天的、空想的のそしりは免れがたいが、理想に直進する行動力には一種のさわやかさがあった。

志賀は、武者小路が愛と正義を説く楽天家であるのに対して、不正・虚偽を憎むきびしい道徳性と鋭い感受性の持ち主で、その文学的特徴は初期の『網走まで』（明41）『或る朝』（明42）などからもうかがわれるように、快不快の自己の感情を判断の基準とする主我的な態度で、精神の緊張感に美を認め、感傷のない意志的な生き方に徹したたくましさにある。長年父との不和に悩み、自我と古い〈家〉との対立にあくまでも自己の人間的要求を貫く妥協のない姿勢をとり、『大津順吉』（大1）『和解』（大6）などを書いて冷徹なリアリズムの作風を確立した。父との和解後は、東洋的調和を求める心境小説へ進んだが、唯一の長編『暗夜行路』（大10―昭12）では、〈父子争闘のテーマ〉が暗い宿命を

持った主人公の運命劇に生かされ、自己拡充の戦いが最後に自然との調和感に救済されるまでの精神遍歴が描かれている。

有島はキリスト教の信仰から文学に進み、欧米遊学の間に民主主義詩人ホイットマンや無政府主義者クロポトキンに傾倒するなど、幅のある思想性を持ち、それゆえ生涯自分の内部の思想的矛盾に苦しみながら誠実に生きぬいた作家である。『カインの末裔』(大6)『生まれ生づる悩み』(大7)などは北海道の自然を背景とした人間のたくましい生き方を描いた力作であり、長編『或る女』(大8)は因襲や道徳に抗して本能的な生き方に殉じる新しい女の悲劇を描いた本格的なリアリズム小説である。かれは第一次大戦後の日本社会の転換期に際して、最も痛切な精神の危機感を自覚したひとりで、「宣言一つ」(大11)で自分の階級的な限界と不安を語り、また北海道に所有した農場を小作人に解放したりしたが、その悩みを解決することができず自殺した。

「白樺」の作家としては、他に『竹沢先生と言ふ人』(大13)を書いた長与善郎や『多情仏心』(大11)で〈真ごころ哲学〉を説いた里見弴がおり、傍系に戯曲『出家とその弟子』(大5)で知られる倉田百三がいる。

「新思想」派の新現実主義　「白樺」派に続いて文壇に新風を吹きこんだのは「新思潮」(第三・四次)の同人、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、山本有三、豊島与志雄らの新現実主義の作家たちである。この派の人々は、美と理想の回復を求める反自然主義の流れに立ちながら、耽美派のように官能や情調におぼれることができず、また「白樺」派の現実の暗さや醜さを素通りした理想主義のあまりに楽天的、肯定的な傾向に対しては懐疑的で、自然主義の平板なリアリズムとは異なった方法で新しい現実把握を試みようとした。すなわち理知的に人生と現実を截断し、テーマを設定し、心理分析の手法を用いながら、主観的解釈を加えて現実を再構成しようとした。自然主義作家たちが体験主義的であったのに比べると教養主義的な立場であり、なによりも理知の働きとはなやかな技巧で特色を示している。

この派の代表的存在である芥川は、歴史小説作家として出発したが、初期の『羅生門』(大4)『鼻』『芋粥』

（大5）などでは、今昔物語や宇治拾遺物語などの古典に題材を借り、近代的な解釈で人間の心理やエゴイズムを皮肉に描いている。王朝時代物、江戸時代物、切支丹物、開化期物、中国物というふうに、歴史に題材を求めた作品を相次いで発表したが、憂愁に満ちた人生観、繊細な感受性、機知や皮肉に富んだ人間観察などを織りまぜた華麗な文章で、その才能に目をみはらせた。かれは「人生は一行のボードレエルにも若かない」と言う芸術至上主義者で、『戯作三昧』（大6）『地獄変』（大7）などでは、芸術的良心と世俗的道徳との対立をテーマとして取り扱っているが、かれ自身の生き方に深い矛盾を感じるようになり、しだいに人生に対する懐疑的、虚無的な傾向を強め、後期の現代小説は暗鬱な色調をたたえている。ことに晩年の『河童』『蜃気楼』『歯車』（昭2）などは精神の敗北の記録といったもので、鬼気せまるものがある。「ぼんやりした不安」にかられたという彼の悲痛な自殺は、大正文学の終焉を意味するものとして、社会に大きな衝撃を与えた。

芥川がみずからの知性に傷つき倒れた感があるのに比して、現実主義的な態度で、常識と妥協する通俗性を生かしながら文壇的に成功したのが菊池寛である。かれも芥川と同じように歴史に題材を借りたテーマ小説に長じ、『忠直卿行状記』『恩讐の彼方』（大8）『入れ札』（大10）などの佳作があるが、戯曲の創作にもつとめ、新聞小説でも新生面を開拓し、商業ジャーナリズムの繁栄に乗じた大衆性で大きな成功を収めた。『新思潮』派の作家としては、他に『学生時代』（大7）『破船』（大11）などで人間の心理を軽妙な筆致で描いた久米正雄、『生命の冠』（大9）『同志の人々』（大12）などの戯曲で活躍し、『生きとし生けるもの』（大15）で小説に転じた山本有三などが注目される。

「奇蹟」派と私小説　以上のように大正期は反自然主義の諸派のはなばなしさが目だったが、もちろん自然主義リアリズムの影響は強く残存していて、既成作家たちの活動のほかに、雑誌「奇蹟」（大1創刊）から出発した広津和郎や葛西善蔵、これと近い関係にあった宇野浩二らの新人が活躍した。かれらは自然主義の伝統を受けつぎながら、その行きづまりを打開しようとして、外部現実よりも心の問題を重視し、心理的リ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com